様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２９ 日現在

機関番号：４１２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０１９８７

研究課題名（和文）有賀同族団論の再検討：歴史社会学とコモンズ論の観点から

研究課題名（英文）Reconsideration of "Douzoku(cognate groups) Theory" by Aruga Kizaemon: from the Standpoint of Historical Sociology and Commons Theory

研究代表者
三須田　善暢（MISUDA, Yosinobu）

岩手県立大学盛岡短期大学部・その他部局等・教授

研究者番号：１０４１２９２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、社会学その他の分野を中心に今日にいたるまで重要な位置を占めている有賀喜左衛門の「同族団」理論を、その経験的根拠である岩手県二戸郡「石神村」の実態調査の再検討・追跡調査を踏まえて、歴史社会学的視点およびコモンズ論の視点から批判的検討を行った。
本研究では、「石神村」大屋齋藤家史料の分析を通じた同家同族団の社会経済構造およびそれと関連した地域資源管理構造の把握、くわえて、現在の石神集落とその周辺地域の生産-生活過程と社会構造の把握を中心におこなった。その作業によって、従来の「同族団」概念にとらわれない、地方名望家像と新たな村落社会像を模索した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義は、新史料の発掘と分析により、石神の同族団の内実とその変遷をより精緻に把握し、既存の研究結果を相対化したことである。具体的には、これまで重視されなかった経済的要因や名子層の生活過程を踏まえること、および、他の同族団および他の漆器産地と比較することによる分析の深化である。これにより、市場経済の進展のなかでの「家」と「同族」の変容を把握し、石神集落の位置づけをおこない、村落社会研究における伝統的方法を再生させる試みに本研究の意義があると考えている。

研究成果の概要（英文）：This study critically examines Aruga Kizaemon's "Douzooku (clan)" theory, which has occupied an important position in Japanese sociology and other fields to this time, from the perspective of historical sociology and commons theory. This critical review is based on a re-examination and follow-up study of the empirical basis for this theory, the actual situation in "Isigami-hamlet" in Ninohe-ward, Iwate Prefecture.
This study analyzed the socio-economic structure of the Oya Saito family in Isigami-hamlet and the related local resource management structure, as well as the production-living process and social structure of the current Isigami-hamlet and its surrounding area, through the analysis of historical documents.
Through this work, we sought a new image of the local celebrity and the village society that is not bound by the conventional concept of "douzoku" groups.

研究分野：社会学

キーワード：日本農村社会学　同族団　地方名望家　コモンズ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本農村社会学の確立者の一人とされる有賀喜左衛門の理論構築における経験的基礎の一つが、1930 年代の岩手県石神村であった。有賀は、その調査モノグラフ（有賀 1939）で、石神名子制度における相互扶助関係を綿密に記述・分析した。さらにその他のデータを踏まえ、有賀は日本社会の基礎構造たる「同族団」理論を解明していき、広く日本社会を解明することに寄与していった（有賀 1943）。

しかし、有賀の石神調査は経済的要因および山林関係の諸要因(森林資源や共有地)を踏まえた分析が弱いという欠点を孕んでいる。端的にいえば、石神モノグラフでは、大屋・名子双方の経営の状況が詳細にはわからない。齋藤家は、江戸時代には漆器問屋として漆器販売を行い、遠くは盛岡･八戸･大館方面へ漆器を卸しながら財をなしたが､その点については詳述されていない。また、膨大な山林を所有し共有地の管理にも関わっており、それら森林資源と経営の関係もよくわからない。くわえて、大屋－名子、名子同士の相互扶助関係の把握は詳しいが、具体的な農作業の様子や商工業の事情等の生産‐生活過程の把握は不十分である。

その上、石神調査では調査対象者の偏りも欠点と指摘されている（布施 1935）。名子・作子層への聞き取りが皆無に等しいのである。この点も、生産‐生活過程把握に影響し、相互扶助関係の内実の理解をゆがめている恐れがある。

いうまでもなく、有賀の「同族団」論のみで今日の農村社会を理解・把握することは難しい。しかし、日本社会の基礎構造の理解には有効性と射程を備えており（細谷 2012）、今後も彫琢していくことが求められているといってよい。上記のような欠点を考慮に入れ、当時の分析で等閑視された経済的要因や山林関係の諸要因を踏まえ、調査対象を広げることができるならば、名子制度と同族団の理解をさらに深化・精緻化させて、隘路にあるといわれて久しい農村研究（社会学・経済史）の理論的発展へ寄与することが可能になるのではないか。

本研究は、上記のように、従来の村落研究の財産である研究課題･手法を否定し去るのではなく、それを再検討しつつ再生させて、現代の農山漁村研究にも射程のおよぶ新たな分析枠組みを提示することを考え、企画された。

２．研究の目的

本研究は次の事を目的とする。岩手県旧二戸郡「石神」集落（現八幡平市石神）の大屋齋藤家で公開された新史料を整理・解読・分析（歴史的検証作業）し、現集落の農家調査と周辺の地域社会構造調査をおこなう（現在の実態調査）。

それにより、有賀が示した「同族団」理論の再検討をおこない、「同族団」概念にとらわれない新たな地方名望家像および分析枠組みとしての社会結合理論の視座を把握し、村落社会像の模索と日本村落研究の理論的発展への寄与を試みる。

村落研究において、すでに同族団の研究は過去のものとみなされがちである。しかし、英国と信州上田との国際比較研究（長谷部ほか編 2009）のように、比較家族史研究や小経営論の国際比較においてはいまだに射程はあり、現状を歴史的なスパンに位置づけることで、市場経済の進展のなかでの「家」と「同族」がどのように変容していくかという点は深く分析できるであろう。「古い」封建遺制として捉えられがちであった名子制度が、歴史社会学の見地からは「新しい」市場経済と有機的な関係にあったことが、東北・山間地である石神の事例から明らかになると思われる。

上記のことは、農村社会編成理解を高次において把握しなおすことであり、農村研究の別様の可能性を見出しうることにつながる。「同族団」偏重といわれた有賀の理論を、またその後家村理論に収斂していった農村社会理論を、その始原に戻り相対化することは、現在隘路にある農村研究（社会学・経済史）の理論的発展へ寄与できよう。

本研究は、上記のように、従来の村落研究の財産である研究課題･手法を再検討しつつ再生させて､現代の農山漁村研究にも射程のおよぶ新たな分析枠組みを提示することを考え､行われた。

３．研究の方法

本研究では当初の課題を研究過程で精査し、最終的に主として 2 つの課題を設定して研究を進めた。

（1）新史料を利用しての、名子制度に対する経済的側面及び資源管理的側面からの再検討：有賀の調査研究における脆弱性を克服するため、新規に公開された斎藤家所蔵の経済的および山林関係諸史料を利用する。それにより、これまで弱かった漆器問屋としての側面からの分析を重視し、市場経済が進展するなかで非市場経済要因としての名子制度（および全体的相互給付関係）がどのような関わりをもっていたのかを具体的に把握する。その際には、隣接する二戸市の浄法寺塗、および秋田川連漆器の漆器問屋との比較を通して、石神の特徴を把握する。また、同様に分析が弱かった山林経営・入会地管理の史料をも用い、近年のコモンズ論の流れに位置づけることから、地域資源管理の点から大屋の経営を検討する。こうした作業を踏まえて石神の同族団・名子制度を位置づける。

（2）現住集落農家調査による名子層の生産‐生活過程把握：本研究では有賀の調査のもう一つの脆弱性であった名子層の状況および戦後高度成長期以降の地域社会の展開過程把握を克服するため、現住集落世帯の悉皆に近い調査により、過去から現在に至る名子層の生産‐生活過程の把握をおこなう。それによって集落社会および地域社会のダイナミズムを描きだし、その特徴を把握する。

４．研究成果

具体的な成果については、各年次の研究実績の概要に記載した。

研究会は、2018 年度（5 回）、2019 年度（3 回）、2020 年度（2 回）、2021 年度（5 回）、2022 年度（4 回）実施し、 各自が担当している分野における課題について提示し、ディスカッションを行った。2019 年度には、日本村落研究学会大会にてセッションを組んで、報告を行った。

また、資料収集、撮影、調査等のフィールドワークはそれぞれの年次に、長期休暇時などに数回ずつ行っている。

三須田を中心に発見した浅沢地区（石神、中佐井等）の新資料については、有志で写真撮影を行い、以前の目録にくわえて補足の目録化を進めている。本目録に関しては今後、公開を視野に検討を進めている。

本科研プロジェクトは 2022 年度で終了となったものの、研究期間終了後も本研究プロジェクトは継続する予定である。2019 年度後半からは新型コロナウイルスの影響で調査等が出来なくなっていたが、2022 年度に入り状況が改善してきたため調査を再開しつつある。残念ながら事情により研究グループを離脱した者がいるが、研究グループを再編成し、研究費を別途確保して、研究のまとめ及び収集資料の整理・公開を目指して研究活動を継続していく予定である。

【文献】

有賀喜左衛門，1939，『南部二戸郡石神村に於ける大家族制度と名子制度』アチック・ミューゼアム.
――，1943，『日本家族制度と小作制度』河出書房.
長谷部弘・高橋基泰・山内太編，2009，『近世日本の地域社会と共同性－近世上田領上塩尻村の総合研究Ⅰ－』刀水書房.
布施辰治，1935，「土屋喬雄氏の「名子部落を訪ねて」を読んで」『経済評論』2（11）.
細谷昂，2012，『家と村の社会学』御茶の水書房.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 庄司知恵子	４．巻 23
２．論文標題 これからの「むら」を捉える視座	５．発行年 2022年
３．雑誌名 総合政策	６．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 脇野博	４．巻 56
２．論文標題 一九世紀南部領の山林資源復元に関する試みについて	５．発行年 2022年
３．雑誌名 徳川林政史研究所研究紀要	６．最初と最後の頁 21-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 長谷部弘・三須田善暢・泉桂子	４．巻 147
２．論文標題 あらためて中村吉治を読む 煙山調査を中心に	５．発行年 2020年
３．雑誌名 岩手県立大学総合政策学会ワーキングペーパー	６．最初と最後の頁 1-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 三須田善暢	４．巻 71(3)
２．論文標題 書評 高橋明善著『自然村再考』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 社会学評論	６．最初と最後の頁 508-509
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三須田善暢・庄司知恵子	4．巻 22
2．論文標題 研究ノート 日記に見る昭和前期石神大屋齋藤家の生産と生活	5．発行年 2020年
3．雑誌名 岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集	6．最初と最後の頁 45-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 林雅秀	4．巻 101
2．論文標題 岩手県北部地方の農家がウルシ植栽を選択した要因	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本森林学会誌	6．最初と最後の頁 328-336
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 MISUDA, Yosinobu and SATO, Kyoko	4．巻 21
2．論文標題 The Folk Craft (Mingei) Movement and Tohoku Rural Community during the Syo;wa Depression Period：A Sketch of an Intellectual Intersection	5．発行年 2019年
3．雑誌名 岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集	6．最初と最後の頁 59-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 林雅秀	4．巻 30
2．論文標題 共有林における部外者入山制を促す社会関係	5．発行年 2018年
3．雑誌名 地域社会学会年報	6．最初と最後の頁 21-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 林雅秀	４．巻 1616
２．論文標題 山村における共有林野の多様な利用形態	５．発行年 2019年
３．雑誌名 山林	６．最初と最後の頁 44-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 三須田善暢・庄司知恵子
２．発表標題 日記からみえる昭和前期石神大屋齋藤家の生産と生活：石神調査研究の中間報告（1）
３．学会等名 第67回日本村落研究学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 長谷部弘・王慧子
２．発表標題 南部二戸郡浅沢村石神部落の経済史的諸条件：石神調査研究の中間報告（2）
３．学会等名 第67回日本村落研究学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 林雅秀・脇野博・石沢真貴
２．発表標題 石神と川連の漆器生産をめぐる社会関係の比較：石神調査研究の中間報告（4）
３．学会等名 第67回日本村落研究学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hayashi, Masahide
２．発表標題 Institutions for Nonlocals' Use of Grassland Commons
３．学会等名 IASC2019
４．発表年 2019年

１．発表者名 MISUDA, Yosinobu and SATO, Kyoko
２．発表標題 The Folk Craft (Mingei) Movement and Japanese Rural Society during the Syowa Depression Period
３．学会等名 The 6th International Conference of Asian Rural Sociology Association（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 三須田善暢
２．発表標題 煙山調査に対する有賀喜左衛門の反応：有賀の読書メモから
３．学会等名 2018年度日本村落研究学会東北地区研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 三須田善暢
２．発表標題 有賀喜左衛門は煙山村調査をどう読んだか：有賀の読書ノートを中心に
３．学会等名 第66回日本村落研究学会大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 長谷部弘
２．発表標題 中村史学再考－煙山調査から学ぶ―
３．学会等名 2018年度日本村落研究学会東北地区研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 林雅秀
２．発表標題 岩手県北地方におけるウルシ立木の生産性
３．学会等名 第130回日本森林学会大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	王　慧子 (Wang Huizi) (00748965)	東北大学・経済学研究科・博士研究員 (11301)	
研究分担者	石沢　真貴 (Ishizawa Maki) (20321995)	秋田大学・教育文化学部・教授 (11401)	
研究分担者	林　雅秀 (Hayashi Masahide) (30353816)	山形大学・農学部・准教授 (11501)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	庄司　知恵子 (Shoji Chieko) (30549986)	岩手県立大学・社会福祉学部・准教授 (21201)	
研究分担者	長谷部　弘 (Hasebe Hiroshi) (50164835)	東北大学・経済学研究科・名誉教授 (11301)	
研究分担者	脇野　博 (Wakino Hiroshi) (80220846)	岩手大学・教学マネジメントセンター・嘱託教授 (11201)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	大野　啓 (Oono Hajime)	佛教大学・文学部・非常勤講師 (34314)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関